

# 淡江大學 95 學年度碩士班招生考試試題

系別：日本語文學系

科目：日 文(閱讀、作文)

164-2

准帶項目請打「V」

簡單型計算機

本試題共 二 頁

本試題雙面印製

## 壹、閱讀測驗

一、次の文章を読んで、後ろの問いに答えよ。

失業者が街にあふれた大恐慌時代、米国ではジグソーパズルやクロスワードが大変な人気を集めた。紙片をつなぎ、隠された言葉を探すことで、人々は現世のつらさを一時忘れた。

いま欧米でジグソーやクロスワード以来の流行と言われているのは「数独(すうどく)」という日本ゆかりのパズルだ。書店や駅売店にはsudokuと題するパズル本が並び、高級紙が娯楽面で出題を競う。あまりの熱中ぶりに「乗務中は数独禁止」と社員に命じた航空会社もある。

世界的な流行は東京都台東区の小さな出版社から始まった。社員18人のニコリ社だ。社長の鍛冶(かじ)真起(まき)さん(54)が20年ほど前、縦横9列のマス目を数字で埋める古い遊びを見つけ、自社のパズル誌に載せた。1から9まで一桁(けた)の数、言わば独身の数しか使わないパズルだから、数独と名付けた。

ニュージーランド出身の元判事が日本を旅行中、たまたま書店で数独を見て夢中になる。自分で大量に作問し、英タイムズ紙に新企画として持ち込んだ。一昨年の秋に掲載が始まると、他紙も懸賞品をつけて追隨した。昨年は米新聞界へ広がった。

数独ブームをどう見るか。「クロスワードと違って言語の壁がない」「数の神秘に触れる気がする」。流行先の国々から記者がニコリ社を訪れ、盛んに分析を試みる。「数独で鍛えるから日本の生徒は数学が強い」という記事もあったが、これは美しき誤解だろう。

昨日までイタリアのルッカでは、初の世界大会も開かれた。和名のパズル数独は、ジグソーやクロスワードのように長生きするのだろうか。

(朝日新聞「天声人語」2006.03.12)

問題一、次の単語の読み方を書きなさい。(10%)

1、大恐慌時代 2、紙片 3、欧米 4、懸賞品 5、追隨

問題二、不景気とパズルとの関係について述べなさい。(10%)

問題三、数独の由来と流行った理由を説明しなさい。(10%)

二、次の文章を読んで、後ろの問いに答えよ。

ある国の人々の生活や考え方を隅々まで支配している、その国の文化というものは、そこに生まれ育った人々にとっては、空気の存在と同じく、元来自覚されにくいものである。人々にとって、自分の国のすべてのことは、当たり前であり、それ以外の在り方、やり方などは、ある筈もないと思って大部分の人は一生を過すのである。

もちろん今日のように、テレビ、新聞などの情報手段が発達し、外国旅行をする人も増え、町中で外人を見かけることも珍しくなくなった時代では、一般の人といえども、国が違えば風俗習慣が違い、人々の行動も異っている程度のことは知っている。

◀ 注意背面尚有試題 ▶

系別：日本語文學系

科目：日 文(閱讀、作文)

准帶項目請打「V」

簡單型計算機

本試題共 二 頁

しかし普通の人が気付く、いわゆる文化の相違とは、比較的目につきやすい、具体的な現象に限られることが多いのである。一部の学者が、あらわな文化 (overt culture) と呼ぶ、文化の側面がこれである。

食事の場合を再び例にとれば、日本では箸を使うが、欧米ではスプーン、ナイフとフォークを用いるといったことがこれに当る。また日本人は生雲丹 (うに) やなまこを賞味するが、向うで、血のソーセージやひつじの脳味噌を出されたりすると閉口する。そしてお互いに、外国人はよくもあんなものが食べられると思ったりするの、あらわな文化の項目の違いに関係している。

この顕在的な文化に対して、目に見えにくい、それだけに、仲々気が付かない文化の側面のことを、かくれた文化 (covert culture) と呼ぶ。食器の例で言えば、現在では日本人も、スプーンやフォークなど、かなり使いなれて、殊に若い人などは、箸よりも上手に使うくらいである。

ところが良く観察すると、西洋人と使い方が微妙に違うのである。たとえば日本人は、スプーンでスープを飲むとき、スプーンを顔と平行になるような角度で、口に持って行く。そこで必然的にスプーンの横に口をつけて飲む形になる。しかも吸い込むようにして、液体を口に入れる。「吸い物」の伝統が残るのである。

ところが西洋人は、どちらかと言えば、スプーンを顔と直角になるように近づけ、スプーン先端から飲む。そのとき、吸うのではなく流し込むようにするため、スプーンの先が、口の中に相当入り込むことになる。

そのほか、姿勢が違うとか、皿と口の距離の違いとか、細かにそのつもりで観察すると、まだまだ相違はある。

このように、文化の項目としては全く同一のスプーンを使いながら、日本人と西洋人との間には、ちょっと人が気が付かない構造的なちがいが見られる。文化というものは、このような、当の本人が自覚していない、無数の細かい習慣の形式から成立しているようなものであって、この、かくれた部分に気付くことこそ、異文化理解の鍵であり、また外国語を学習することの重要な意義の一つはここにあると言えよう。

近頃、学校で英語やフランス語を何年も勉強しても、一向に使い物にならないという批難をよくきくが、本当は、実際の生活場面を離れ、しかも日本人の先生が相手に、会話が上手になったり、手紙が巧く書ける筈もないし、またその必要もないのである。

それよりも、ことばというものが、世界をいかに違った角度、方法で切りとるものかというような問題を、学生が理解するようになることの方が、遥かに意義があり、しかもどこでも、誰にでもできることなのである。ただ残念なことに、外国語の実際の教授の場で、今迄はこの点が意外に省みられていなかったにすぎない。

(鈴木孝夫「ことばと文化」による)

問題一、次の言葉の読み方を書きなさい。(10%)

1、元来 2、筈 3、町中 4、批難 5、微妙

問題二、具体例を挙げ、あらわな文化とかくれた文化との違いを説明しなさい。(10%)

問題三、作者の言いたいことを 100 字以内にまとめなさい。(10%)

貳・作文 (40%)

題目：「異文化理解」